

食味・形状に優れるイチゴ新品種 「いばらキッス」(仮称)

全国のイチゴ主産県では県独自の品種が育成され、ブランド化による有利販売が行われています。そこで本県においても、県内産地の活性化を図るため、イチゴの育種に取り組み、新品種「いばらキッス」を育成しました。平成22年2月に品種登録を出願し、同年4月に出願公表されています(出願番号 第24622号)。「いばらキッス」は、「とちおとめ」と比べて、食味・形状に優れ、また、収量が安定しています。

果実形状の特性

「とちおとめ」を種子親、「ひたち1号」(「レッドパール」×「章姫」)を花粉親とする交配組合せの中から、品質や食味を重点に選抜、育成しました。

果実の形は「とちおとめ」より長めの円錐形です。果皮色は濃赤色で光沢が強く、果肉色は「とちおとめ」と同様の鮮赤色です。乱形果が少なく形状が整っています。



写真 「いばらキッス」の果実

果実品質の特徴

糖度は「とちおとめ」よりやや高く、酸度は同等で、甘さと酸味のバランスが良く、食味が優れます。

「とちおとめ」よりやや柔らかいのでジューシーな食感が特徴です。

暖候期における糖度の低下が少ないので、食味が安定しています。

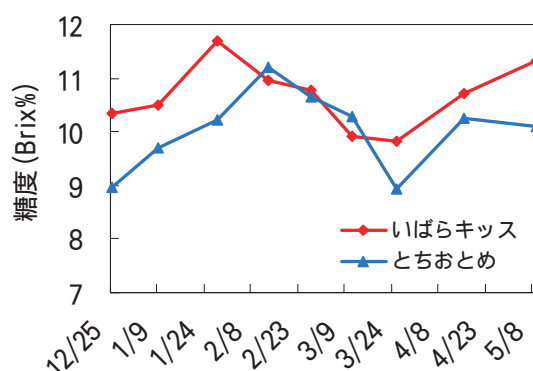


図 果実糖度の時期別推移 (H19年度 完熟果実を測定)

生育・収量の特徴

生育は「とちおとめ」より旺盛で、厳寒期における草勢の低下が少ないため、中休みが発生しにくく、収穫期間を通して安定して収穫を行うことができます。

収量は「とちおとめ」よりやや多く、大果率が高いため、2 L以上の果実割合が多くみられます。

果実の形状が乱れにくく、正形果率が高いため収穫後のパック詰めが行いやすくなります。

炭そ病の発生が「とちおとめ」よりもやや多い傾向が見られるので、育苗期からの防除を十分に行なう必要があります。また、草勢が強いため、「とちおとめ」と栽培管理が異なる部分があります。

表 収量および果実品質 (H18~21年度平均、毎年11~4月収穫)

品 種 名	収穫 果数 ¹⁾ (個/株)	収量 ¹⁾ (kg/a)	1果重 ²⁾ (g)	大果率 ³⁾ (%)	硬度 ⁴⁾ (kg)	糖度 (%)	酸度 (%)
いばらキッス	30.1	331	13.7	36.1	0.49	10.3	0.75
とちおとめ	27.4	281	12.0	28.0	0.51	9.9	0.74

1) 7 g以上の果実、 2) 収穫全期間果実平均、 3) 15 g以上の果実の割合、 4) 果実硬度計・円柱形5 mmプランジャーの貫入抵抗値